

認知言語学的観点を取り入れた日本語陳述副詞の 意味と習得に関する研究

－「きっと」と「必ず」の場合－

王 冲

要 旨

陳述副詞の習得が難しいことはよく先行研究で指摘されている。本研究は「きっと」「必ず」を事例として認知言語学的観点から陳述副詞の意味と習得の研究を行い、それを踏まえて陳述副詞の有効な指導法を探った。

【キーワード】

プロトタイプ 意味構造 概念変化 カテゴリ体系の再編成 usage-based model

1. はじめに

陳述副詞の習得が難しいことはよく先行研究で指摘されている。しかし、学習者にとってなぜ陳述副詞の習得が難しいか、どの部分が難しいか、またこれに対して教師側はどう指導すればいいかなどはまだ明らかにされていないままである。これらを明らかにするためには、それなりのデータに基づく習得研究も基礎研究として重要である。本研究は「きっと」「必ず」を事例として認知言語学的観点から陳述副詞の意味と習得の研究を行い、それを踏まえて陳述副詞の有効な指導法を探った。「きっと」「必ず」は多様な用法をもつ類義語であり、中国語に訳されるとき、ほとんど「一定」となる。よって、これらの陳述副詞の習得には、陳述副詞自体の複雑さ、類義表現自体の難しさ、および母語である中国語の影響などがあると考えられる。したがって、本研究では効果的な陳述副詞の習得及び指導のための基礎研究として、「きっと」「必ず」に関して、以下の4点について研究を行った。

①「きっと」「必ず」の意味構造及びこれらの副詞の共通点と相違点（意味研究）

②「きっと」「必ず」に相当する中国語「一定」の意味構造との対照（対照研究）

③「きっと」「必ず」の習得状況及びそれに与えている要因（習得研究）

④「きっと」「必ず」の教育の現状とより有効的な指導法（インタビュー調査）

ここで、本研究で明らかになった「きっと」「必ず」の意味構造、中国語「一定」との対照、習得研究、教師の指導実態などに関する結果をまとめた上で、総括し考察する。さらに考察に基づき日本語教育における陳述副詞の指導への示唆を考える。

2. 研究結果のまとめ

①「きっと」「必ず」の意味構造及びこれらの副詞の共通点と相違点

本研究では、認知言語学的観点から、多様な用法をもつ類義語である「きっと」と「必ず」の意味構造について探った。先行研究では、「きっと」と「必ず」は類義関係にある副詞として、両者が持つ推量用法だけが強調されてきた。しかし、二語の類義性を比較するだけでは二語が持つ「確率」用法、「意志」用法、「依頼」用法が軽視されてしまう傾向がある。また、これらの語の用法を細かく分類すればするほど、学習者はその複雑さに目が行ってしまい、負担を増やすことになると思われる。そこで本研究では、具体的な用例に基づき、「きっと」「必ず」の各用法を定義し、各用法から共通する意味（スキーマ）を抽出した。逆にスキーマから具体化されたものは「きっと」「必ず」の各用法になる。また、これらの用法間の相互関係を分析することによって「きっと」「必ず」の意味構造を明らかにした。さらに、語の意味構造によって、類義語である「きっと」「必ず」の共通点と相違点も明らかにし、「きっと」と「必ず」は漠然性があり、他方向への拡張と役割分担をしていることを指摘した。

②「きっと」「必ず」に相当する中国語「一定」の意味構造との対照

「きっと」と「必ず」は中国語に訳されるとき、ほとんどの場合「一定」という中国語になる。「一定」には「きっと」「必ず」と同様に「推量」「意志」「依頼」用法があるが、「確率」用法がない。したがって、中国語を母語とする日本語学習者は「きっと」「必ず」と「一定」の間のずれを無視してしまうと、習得が不完全になることが予測できる。本研究では、日本

語の陳述副詞「きっと」「必ず」と中国語の語気副詞「一定」の意味構造及び各用法について比較した。中国語の「一定」の各用法間の拡張関係は日本語の「きっと」「必ず」と反対であり、また「一定」の各用法の使用範囲は「きっと」「必ず」より広いことが明らかにされた。

③「きっと」「必ず」の習得状況及びそれに与えている要因

本研究では自由産出法と受容度の判定の調査を通じて、中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」「必ず」の意味構造の意味知識を母語話者の持っている意味構造の意味知識と比較し分析した。学習者がもっている「きっと」「必ず」の意味認識には母語話者とは大きな相違があることが明らかになった。学習者の持つ意味認識は教科書、辞典、母語である中国語「一定」などの影響を受けている可能性がある。また、学習者の「きっと」の意味認識において、「意志」「依頼」用法は母語の負転移を受けていることも推測できる。また学習者の「必ず」の意味認識では、「意志」「依頼」用法は母語の正転移を受けている可能性があるのに対し、「推量」「確率」用法は母語の負転移を受けている可能性があり、「推量」用法の過剰使用現象、「確率」用法の過少使用現象も見られた。さらに、学習者は「きっと」と「必ず」の境界線について曖昧であり、これらの語の理解は不安定であることも観察された。これらの結果から学習者は中国語の「一定」と日本語の「きっと」「必ず」の概念をはっきり区別していないことと、日本語母語話者は「きっと」「必ず」の使用の拠り所となるカテゴリー体系を持っているのに対して、学習者ではそのカテゴリー体系の獲得は十分になされていないということがわかった。

習得の最初の段階において、学習者は母語の概念を目標言語に持ち込む恐れが強いため、そこで「概念変化」を起こさなければならない。すなわち学習者は、もともと持っている中国語「一定」の概念から日本語の「きっと」と「必ず」の概念へと変化を起こさなければならない。上級段階に入ると、学習者は母語の概念で考えるという過程を経て、母語のカテゴリー体系から直接目標言語へと変換するようになると思われる。すなわち、学習者はもともと持っている中国語の「一定」のカテゴリー体系から「きっと」「必ず」の認知体系へと変換する必要がある。しかし、このような「概念変化」「カテゴリー体系の再編成」は学習者が自力で学ぶことには限界があり、教師側から何らかの有効な指導の提供が必要であるということになる。

④「きっと」「必ず」の教育の現状とより有効な指導法

中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」「必ず」の習得を支援するため、本研究ではまず学習者がよく使用している教科書、辞典における「きっと」「必ず」の説明を挙げて、問題点を指摘した上で、インタビュー調査を通じて中国の大学日本語教育における「きっと」「必ず」の指導の実態を明らかにした。教科書、辞典の説明及び教師の指導では、学習者は「きっと」「必ず」の「概念変化」「カテゴリー体系の再編成」を行うのが難しいと考えられる。そこで具体例を提示して、「きっと」「必ず」「一定」の概念及びカテゴリー体系を生かし、学習者の「概念変化」「カテゴリー体系の再編成」を促す指導法を試みた。

3. 総合的考察

日本語の陳述副詞「きっと」「必ず」はともに「推量」「意志」「依頼」「確率」の用法があり、「推量」用法がプロトタイプで、「意志」「依頼」「確率」用法は「推量」用法が多方向に派生した非プロトタイプ用法である。この結果によると、日本語の「きっと」の場合、epistemic 用法から deontic 用法へ意味拡張がなされていることになる。また、史的観点から、現代語としての使用を見ると、「きっと」は「推量」用法を分担しているのに対し、「必ず」は「意志」「依頼」「確率」用法を分担している。さらに、「きっと」「必ず」は文脈への高い依存性が見え、各用法よりスキーマのほうが際立っていることから漠然性があると窺えた。つまり、日本語の陳述副詞は文末モダリティ表現に対し、モダリティを決定する補助的役割を持っており、また、文末モダリティと共に起して用法が確定するという性質を持っていると言える。

一方、日本語の「きっと」「必ず」に相当する中国語の「一定」にも「推量」「意志」「依頼」用法があるという。しかし、中国語「一定」の各用法の適用範囲は「きっと」「必ず」より広く、非推量用法から推量用法へと意味拡張がされている。

第二言語習得とはカテゴリーの再編成のプロセスであるということもできる。カテゴリー再編成のためには、カテゴリーの成員、スキーマ、プロトタイプ、意味構造を再編成しなければならない。この再編成は「概念変化」「認知変換」を経てはじめて実現できるのである。したがって、目標言語のカテゴリー構造や目標言語と母語のカテゴリー構造との異同を明示的に示すことは効果的であろう。しかし、どのように目標言語の認知的な意味構造を提示したらいいのだろうか。

認知言語学の言語習得のモデル「usage-based model」が主張するように、母語話者は、日常の言語使用の中で具体的な用例からボトムアップ的にスキーマを獲得している。言語習得においては、膨大な言語使用例に接し、繰り返し使用する必要がある。これはつまり、繰り返し使用する中で、文法などの抽象的、スキーマ的な言語知識を習得することにはほかならない。したがって、「きっと」「必ず」の習得にあたっては、「きっと」「必ず」の様々な言語的事例に触れることがまず最も大事なことであろう。

また、「usage-based model」が主張するように、実際の言語習得過程においては、母語話者は言語的事例から一般規則とその規則が適用されて生じたパターンの実例の両方を学びながら、言葉をマスターしていく。この「一般規則」とは、「きっと」「必ず」が実際に用いられる表現のスキーマ化の結果として生じたスキーマそのものである。「その規則が適用されて生じたパターン」が各用法に当たり、そのうち特に活性化されやすい用法がプロトタイプである。つまり、言葉を習得する際はその言葉の意味構造を習得しなければならない。しかし、第二言語習得の場合は、母語の意味構造の転移を受けてしまうと考えられる。特に、日本語の「きっと」「必ず」のスキーマと中国語の「一定」が似ているため、中国語を母語とする日本語学習者は中国語の「一定」の意味構造を借用してしまう危険性がある。この場合、学習者は自力で「きっと」と「必ず」の意味構造を習得できないと考えられる。したがって、学習者に「きっと」と「必ず」の意味構造を習得させるためには、本来、日本語母語話者であれば、言語的事例だけから自然と獲得している「きっと」と「必ず」のスキーマとプロトタイプを明示してやる必要がある。「きっと」と「必ず」は類義語であり、この

「スキーマ」が似ている。しかし、その「スキーマ」が具体化され確立している各用法の使用範囲及びプロトタイプが異なる。したがって、習得過程において、「きっと」と「必ず」の具体的な用法の使用範囲及びその中の最も活性化されやすい用法を理解させて慣習化を通じて定着させることも重要である。つまり授業では、「きっと」「必ず」および中国語の「一定」の用法を明示的に示し、これらの語のイメージをトップダウン的に示すことだけではなく、学習者にできるだけ幅広い具体的な用例に触れさせた上で、プロトタイプ、各用法の使用範囲、及びその意味構造を明示することで、三つの違いを見出させていくことが非常に効果的であると考えられる。具体的に言うと、「きっと」「必ず」の指導において、

- ① 「きっと」「必ず」及び中国語の「一定」のプロトタイプの違いを示すこと
 - ② 「きっと」「必ず」及び中国語の「一定」の意味構造の違いを示すこと
 - ③ 「きっと」「必ず」の各用法の使用範囲の違いを説明すること
 - ④ 「きっと」「必ず」の具体的な例文を示した上で、文脈を理解させること
- などに注意すべきであると思われる。

参考文献

- 黒滝真理子 (2004) 『Deontic→Epistemic の普遍性と相対性—モダリティの日英対照研究—』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻 博士学位論文
- 森山新 (2006) 「認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究1年次報告書」(科学研究費基盤研究(C) 課題番号 17520253 研究代表者: 森山新)

わん ちゃん／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻
mychong1979@yahoo.co.jp